

ロッテルダムのおくら丸

@Rotterdam

わ たしの最初の日本との出会いは、ロンドン郊外サリーの小学校で、副読本として読んだ双子の日本人姉妹のストーリーだったと思う。「日の沈まない」大英帝国イデオロギーがまだ色濃く残っていた当時の英国に、日本のことが報道されることは、一般的

なレヴェルではまずなかった。あったとしても、それは第二次世界大戦における忌まわしい記憶としてのものであったのだろう。ついでだが、アイルランド人に言わせると、大英帝国に「日が沈まない」のは、「暗闇でのイギリス人のおこないを、神は信用しないから」だ、となる。

次の日本との出会いは、1964年のオランダであった。当時わたしの父親は、ロッテルダムの英総領事を務めていた。姉たちをイングランドの寄宿校に残し、未婚のわたしが、両親についてオランダ生活をエンジョイさせてもらった。

その頃、日本の「見本市船」さくら丸が、ロッテルダムに入港している。「見本市船」というのは、それまでになかったコンセプトらしい。見本市会場となる船そのものまで「展示品」であって、売りに出されているようだ。記憶が定かでないので、当時の新聞記事を検索してみると、「まったく同じ船が、総額350万円で届けられる」と書いてあった。

わたしの通っていた現地の中学校での遠足の目的地が、そのさくら丸だった。

農業用、繊維産業用の重機が、船の一番下のデッキを占領し、上階に行くほど小物サンプルが展示

されていた。自転車の展示もあれば、オートバイの展示もあった。この頃から日本は、「安価で高品質な商品を輸出する国」という評判を獲得していく。

休暇では何回か行ったことはあった。しかしロッテルダムでの生活は、わたしにとっては初めての外国暮らしだった。さくら丸のことを検索していたら、あの頃の甘酸っぱい記憶がたくさんよみがえってくる。

その後わたしは、イングランドの大学を卒業し、ロンドンで環境省に勤務した。一年間で公務員生活に見切りをつけると、わたしは東京に渡った。東京大学の公開自主講座で、宇井純先生たちに多くを学んだ。

イングランドに帰ってからは、大学に戻った。「日本」は、わたしの研究テーマとなった。わたしには、日本人の夫がいる。日本人の息子までできた。さくら丸。遠い過去の出来事である。☺